詩集出版まで

古溝真一郎

ときどき、作品とともにプロフィールを書かないといけない場面があって、とても困る。詩集を1冊出す機会には恵まれたのでそのことは書けるけれど、主催の合評会はお休みしていて、集団への所属もなく、受賞歴もないのでほかに書くべき事柄がない。とはいえ、30年くらい断続的に詩を書いてきて、何か多少はあったでしょと言われれば、あったのかもしれない。プロフィールに堂々と書くほどでもないような何か。

それを詩だと思って書きはじめたのは大阪で暮らす高校生の頃で、特に理由もなくそんなことをする人はクラスに2人位はいたと思う。たまたま梅田の紀伊國屋書店で思潮社の現代詩文庫をいくつか手に取る。わけのわからなさと同時に深くわかってしまう妙な感じに驚く。尾形亀之助、黒田三郎、辻征夫などは特に好きになる。授業中、ノートの片隅に思いつきを書く、それがなんとなく習慣化していく。

せっかく書いたし、人に読んでもらいたい気持ちはあった。大学に入る90年代後半、インターネットで誰かが個人でやっているような詩の投稿掲示板がいくつもできたので、そこに作品を載せたりする。短い感想が2、3もらえると少しうれしいけれど、それだけのことだった。大学の文芸部などに顔を出したりしたが、詩を書いている人はほとんどいなくて、大学にもほとんど行かなくなる。

1999 年、アルバイトのほかはネットばかり見て引きこもっていた時期、たまたま「詩マーケット」というイベントのホームページを見つける。詩マーケットは、寺西幹仁さんが主催していた詩の同人誌即売会イベントで、4回目が大阪・四天王寺の公民館で行われることを知る。スタッフを募集していたので「興味があるので手伝います」とメールをする。なぜそこまで積極的に参加したのかは、よくわからない。暇を持て余していただけかもしれない。

その後の何回か、詩マーケットの手伝いをする。詩マーケットは、詩を書く者どうしの交流よりも、詩を読まない人へ詩を届けることに活動の主眼をおいていた。公民館のほかに、万博記念公園や専門学校のキャンパスで開催したり、「ゲリラマーケット」と称して心斎橋あたりの道端で同人誌を売ることもあった。活動を通じて、詩を多くの人に届ける、興味を持ってもらうことがどれほど困難なことなのかを、肌身で感じる。

詩にたいして真剣に向き合う、寺西さんたち関西の詩人と関わるうちに、もう少し真面目に詩を書いていきたいと思いはじめる。小さな個人誌をつくったり、詩誌「詩学」の投稿欄に作品を送ったりする。投稿は 1、2 度掲載された。平居謙さん主催のいくつかのイベントに参加したこともある。けれど、何ひとつ上手くいった感じがなかった。力量も熱量もまったく足りていなかった。

詩をただ読み、書くことを楽しむ。そのことが何よりも大切なはずだが、詩マーケットにいきなり飛び込んだ私は、たいして詩を読みも書きもしないうちから「詩人の界隈」を先に知ってしまい、そこで得た多少の人間関係のなかで振る舞いを決めていたところがある。詩の活動が長続きするはずがなかった。2001 年、大阪での同棲暮らしを解消し、兵庫県の両親のもとで暮らしはじめると、詩の人間関係からも遠ざかる。

7 年近くかけて大学を卒業したものの、就職氷河期真っ只中でもあり、しばらくフリーターとして何の展望もなく暮らす。そのうち、当時全盛期だった2ちゃんねるに「詩・ポエム板」（略称・詩板）という詩を投稿する掲示板を見つける。ほとんど匿名で、ただ詩を書いたり読んだりすることを楽しめる場所のように感じられた。互いの顔も素性もわからないぶん、とても自由な姿勢で詩について語ることができる。いつのまにか詩板に毎日入り浸るようになる。

当時「都立家政」というハンドルネームだった馬野ミキさんが、詩板で人を集めて東京で朗読会を行って、そうしたイベントを他の地域でもやろうということになった。詩マーケットのスタッフを少しやっていた私は、他の人よりは詩のイベントがどんな感じか知っていることもあり、大阪でのイベントを主催することになる。2003 年 8 月

の同じ日に、東京と仙台、大阪で2ちゃんねる詩板参加者による朗読会が行われる。大阪は、当時フェスティバルゲートにあった上田假奈代さん代表のココルームを借りて開催。参加者は 30 人ほど。

2ちゃんねる朗読会のレポートを「詩学」に掲載しませんか、という依頼が寺西さんから来る。寺西さんは 2001 年に上京し、詩学社で働いていた。2ちゃんねるでは激辛正当派という名前で活動していたが、それが私だということは寺西さんも知らなかったはずで、不思議なめぐり合わせを感じる。朗読会のレポートは詩学の 2003 年 11 月号に掲載された。

実家でフリーターをしながら、いつのまにか 27 歳になっていた。大阪でまともな仕事がしたいと思ったものの、ろくな仕事はなかったため、とにかく仕事はありそうな東京へ行くことにする。大学生の 4 年間ほどアダルトなビデオや本の小売店で働いていた経験を買われ、アダルトビデオ制作会社の営業の職を得る。2004 年 3 月頃、上京。

東京・高円寺で生活をはじめると、急にたくさんの人と会うようになる。仙台で2ちゃんねる朗読会を構造さんと一緒にやっていた POGE さんや、2005 年に第 1 回詩学新人賞を受賞するクロラ(小倉拓也)くんなど、2ちゃんねるでやりとりしていた人とはリアルで友人になる。白井明大さんともこの頃にお会いしたように思う。現在の妻である古﨑未央も2ちゃんねるがきっかけで知り合い、この頃から一緒に暮らしはじめる。いろんな詩のイベントに顔を出すうち、ポエトリーリーディングで活動する詩人の知り合いも増える。寺西さんや里宗巧麻さんなど、大阪で知り合っていた人とも再会する。

詩学社の代表となっていた寺西幹仁さんと馬野ミキさんが共催で、「夜の鳥取砂丘の中心で詩を叫ぶ」というイベントが企画され、その手伝いをする。2004 年 9 月、40 人近くが泊りがけで鳥取に行き、まっくらな夜の鳥取砂丘で詩を朗読した。同じ頃ミキさんが、さいとういんこさん主催の「ウエノ・ポエトリカン・ジャム」というポエトリーリーディングのフェスイベントの代表を引き継ぐという話があり、手伝わないかと声がかかる。制作会社の営業職は多忙を極め、心身を壊しはじめていたので退職。

無職カップルを見兼ねた寺西さんから声がかかり、しばらく古﨑とともに詩学編集のアルバイトをする。その後、書店で働きはじめる。2005 年はウエノ・ポエトリカン・ジャムのスタッフとして何かと忙しかった。9 月に上野・水上野外音楽堂で開催され、100 人の出演者が 8 時間にわたって詩の朗読を行い、周辺ではちょっとした出店やミニステージをつくり、入場者には無料の限定小冊子を配布するなどして、1500 人ほどの集客があった。

イベント終了後は燃え尽きたように何もしない日々。高円寺から練馬へ引っ越す。猫を飼いはじめる。何もしないとはいっても、ポエトリーリーディングのイベントには多少参加したりしていた。2007 年になり、構造さんなど2ちゃんねる出身者を中心にした同人誌「死海」をつくる。これは 2 号まで出した。

詩学社廃業との知らせがあり、寺西さんの自宅兼事務所へ整理の手伝いにいく。寺西さんが鳥取へ帰ることが決まり、ミキさん主催で「寺西幹仁君を送る会」を 2007 年 11 月 28 日に行う。予定時刻になっても、寺西さんは来なかった。「寺西さんのことだから、お酒の飲み過ぎで寝ているんじゃないか」などとみんなで言いながら、寺西さんのいない送別会が終わり、その翌日には自宅で寺西さんが亡くなっているのをミキさんが発見する。私もすぐに駆けつけ、警察で事情を説明したり、関係者に連絡をとったりする。一年後「詩と思想」2008 年 12 月号で、寺西さんのことについてミキさん・クロラくんと座談会で話す機会をもらう。

2008 年にはふたたび無職になり、とにかく生活するので精一杯の状況。翌年の春になってようやく定職を得る。ポエトリーリーディングのイベントや、文学フリマ、東京ポエケットのような企画には少し顔を出すものの、主だった活動は特にないままで過ごす。2010 年からしばらく、2ちゃんねるから繋がりのある角田寿星さん、蛾兆ボルカさんたちの同人誌「Poem ROSETTA」に古﨑とともに参加する。古﨑はこの頃「ユリイカ」に投稿し、頻繁に採用されていて(選者は伊藤比呂美さん)大いに刺激を受ける。

2010 年 9 月、白井さんに誘われて、詩のトークイベント「詩の小径をたずねて」の手伝いをする。そこからの縁で、松下育男さんの「詩の書き方教室」に何度か参加する。作品を一語ずつ丁寧に読んでいくことの大切さにあらためて気づく。2011 年 1 月、古﨑と結婚。3 月、東日本大震災。社会が混乱するとき、自分の詩の言

葉まで身の丈以上であろうとしているように見え、何だか気後ればかり感じてしまう。ほとんど詩を書かなくなる。

2012 年 1 月、子が生まれる。仕事と子育てで忙殺される日々。12 月に練馬の現住所へ引っ越す。「詩学」が好きな有志による「詩学の友の会」を、白井さん、角田さんたちと準備して 2013 年にウェブサイトを公開、断続的に活動を続ける。自身はたまたま、ほんの少しだけ「詩学」に関わっただけだが、これからももっと様々な人に「詩学」について語ってもらえたらと思う。

2014 年、職場でのつながりから、八丁堀に出来たばかりの古書と骨董のお店「逆光」を紹介される。私が詩を書いていると聞いて、店主の鈴木さんが「なにかイベントでもしませんか」と気軽に言うので、「じゃあ合評会をやってみます」と気軽に引き受ける。書かなくなっていた詩を、また書きはじめる。

2015 年 1 月、逆光で合評会「詩について・対話篇」をはじめる。毎回8名前後の参加者の作品を、ひとつ20分程度の時間をかけて読み、感想を語り合う。すべての参加者の、語りたい感想がなくなるまで、可能な限りそれをつづける。先生役はいない。詩は、ひとりの読み手と作品とのあいだで起きるささやかな出来事でしかないけれど、合評会では束の間それらが重なり合う。その一瞬のうれしさが、それぞれの作品をより魅力的にする。

合評会のために作品を書くことになったので、今までにない勢いで作品ができあがり(といっても 2 ヶ月に1篇程度)、これなら詩誌にも投稿できるのではないかと思っていたところ、2016 年の現代詩手帖投稿欄の選者のひとりが廿楽順治さんと知り、投稿をはじめる。廿楽さんは 2010 年頃の松下さんの詩の教室で講師のひとりとして参加されていたので、「最近はこういう作品を書いています」と報告するようなつもりで送る。有り難いことに何度も選んでいただく機会に恵まれる。

2017 年5月の現代詩手帖賞は「該当者なし」だったが、選考では候補者のひとりとして名前を挙げてもらう。ほとんど投稿経験のない自分にとって、出来すぎた結果のように感じる。もうしばらく投稿をつづけようとも考えたが、賞がほしいといった欲求はあまりなく、モチベーションを維持できそうにないため止めてしまう。誰かに選ばれるための投稿だとはいっても、けっきょく自分がよいと思うものを書く以外に書きようはないのだった、それをあらためて強く思い直す。

2017 年から 2018 年にかけていろんな方から何かとお誘いを受けたので、現代詩手帖の投稿欄に作品が載ると読んでくださる人はやはり多いのだと思う。2017 年 11 月に一方井亜稀さん、構造さんに誘っていただき、古﨑とともに仙台ポエトリーフェスに出演。榎本櫻湖さんから詩集出版のお誘い。もともと詩集をつくりたいと考えたことはなかったが、つくるならこのタイミングしかないように思え出版することに決める。2019 年 1 月、七月堂から詩集『きらきらいし』出版。編集はすべて榎本さんにお願いする。帯文は滝口悠生さん。表紙絵は古溝言理。おかげさまで多くの方に読んでいただき、いくつかの媒体で紹介していただく。

詩集出版後は、詩誌・新聞に作品が掲載されるなどしたが、ほかはこれといった活動はせず、作品もほとんど書かなくなる。いくつかその理由を挙げるとすれば、2019 年 6 月に親しい友人であるともちゃん9さいが亡くなったこと、7 月から職場が変わり業務時間が増えたこと、2020 年新型コロナウイルスの流行が起こったこと。いつしか詩を住まわせるためのささやかな場所が、生活から失われてしまったことによる。

気がつけば 2023 年も半分が過ぎようとしていて、相変わらず詩を書く場所からは遠いところで生活している。でも突然こうして平居さんから原稿依頼をもらったり、ときどきに、詩を思い出すきっかけを誰かが与えてくれる。生きている限りは、また詩が生活の前面にあらわれることもあるだろう。それは明日かもしれないし、何十年後かもしれないけれど。

※

詩集『きらきらいし』とその周辺について、少し書き足しておく。

もともと自費で詩集をつくりたいとはあまり思っておらず、出すなら死後にでも、いかにも饅頭本といった感じで誰がつくってくれればいいかな、くらいの姿勢だった。けれども、1 年ほど投稿してちょうど 1 冊分くらいの作品が貯まったタイミングで、榎本櫻湖さんと、もうひとり尊敬する詩人の方から、2018 年のほぼ同時期に「詩集を出さないか」と打診される。こういうことはおそらく、人生で2度はないだろう、詩集をつくるならきっと今しかない、と思う。

遡って 2015 年 7 月、リブロ池袋本店が閉店する直前、店内にひと月半ほど詩書専門店「ぽえむ・ぱろうる」が復活した。閉店を惜しみつつ店内を眺め、居合わせた思潮社の編集の方とちょっと話をしたりしながら、平台を見ていた。ちょうど復刻したばかりの黒田三郎『小さなユリと』(夏葉社)が積まれている。高校生のころから大好きな黒田三郎なので、中身はもちろん全部知っている。けれど、こうして小さなユリ作の表紙絵に包まれた、小さな詩集を手にとって読んでみると、言葉ひとつひとつが一層輝いてみえる。と同時に、不遜にも「今なら、こんな詩集を自分なりにつくれるかもしれない」という思いつきが、妙に現実感のある手触りをもって心に浮かぶ。これはやりがいのあるテーマだと思った。主催の合評会は 1 月に始めたばかりで、子は 3 歳半だった。

2016 年からはじめた現代詩手帖の投稿は「父と子の日常」を軸にして書くことになる。このテーマは、それこそ黒田三郎だったり、山之口貘の「ミミコ」の詩だったり、先達がたくさんいて一定の読まれ方がある。だから、父と子がそこにいるということさえわかれば、ほとんど何の説明もしなくても、読者には行間を補完してもらえる。詩のなかで「私」の「感情」などは一切表現しなくてよい。あとは詩の倫理にしたがって、ことばや行運びの楽しさに関わっていけばいいだけだった。いざ詩集をつくることになり、榎本さんに原稿をすべて読んでもらった後、榎本さんから『小さなユリと』のようなものを作りたいと聞いたとき、この試みは成功したのかもしれないと思った。

この詩集はかなりシンプルな構成で、作品を制作順に並べてある。冒頭の作品内には 2008 年という西暦が記されていて、出版直前の 2018 年までの 10 年間ほどをまとめたことがわかるようになっている。環境や家族が変化していくため、物語として読める部分はあるのかもしれない。なお、はじめの3作は人前で朗読することを目的にして書いているので、ある程度の長さがあり、そのための言葉選びがされている。それ以外は黙読を前提にした書き方をしている。